

# ドル/円相場のトレード戦略

## ■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値103円55銭をあっさり割り込み、2013年11月以来の100円割れとなり、一時99円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95円割れをもイメージする必要が出てきました。

95円水準は、2011年の安値から2015年の高値の61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、6月24日の99円はさすがに記録的なドル下がり過ぎと考えられます。

52週移動平均との乖離で見ると、24日の99円では約15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した2008年の下方乖離とほぼ同じ水準になります。

相場が落ち着きを取り戻せば、過度な下がり過ぎの反動で105円程度までの戻りが期待できるかも知れません。

## ■ 短期展望

先週は、英国の国民投票での EU 離脱を受けたパニック的な相場心理が落ち着きを見せる動きとなりました。

## ドル/円相場のトレード戦略

---

週初からゆっくりとした動きながらドルの買戻しが進み 103 円台を回復しました。

しかし、米国の利上げ先送り観測が強まるなど、ドルを一段と上昇させる材料は少なく 103 円台は既に重くなっています。

とはいえ、投機筋はドル売り・円買いポジションを維持しており 100 円に近づく場面では利食い意欲が強まるため、下値も限られたのとなりそうです。

したがって、基本的には、目先 101 円～103 円程度の狭いレンジでの神経質な取引継続がメインシナリオといえるでしょう。

しかし、市場の焦点が再び米国の金融政策に向いてきているため、6 日公表の利上げ見送りを決定した 6 月開催の連邦公開市場委員会（FOMC）議事録や、8 日発表の米雇用統計が波乱要因となりそうです。

米雇用統計などの結果により 103 円を再び越えていくことが出来れば 104 円半ば程度まで上値余地が広がるものと考えます。